

新都市医師会長の紹介

札幌市医師会

会長 今 真人 先生



令和3年6月5日に行われた第130回札幌市医師会定時代議員会で、松家治道前会長の後任として今 真人先生が第19代会長に就任されましたのでご紹介させていただきます。今 真人先生は昭和33年生まれの62歳です。昭和61年に獨協医科大学を卒業され、同年4月に東京女子医科大学第二外科に入局されました。平成8年に同大学の救急医療科・講師、平成11年に助教授に就任されました。平成12年から今医院に勤務され平成25年に同医院の理事長・院長となられ、現在に至ります。

札幌市医師会には平成10年に入会され、平成15年に理事に就任されました。上埜執行部にて医政部長、その後、山光執行部にて財務部長、会員福祉部長、常務理事を歴任され、平成25年から松家前会長のもとで副会長を務められました。地域包括ケアシステムの構築、札幌市救急医療体制の維持、認知症対策、地域医療構想整備、新型コロナ対策等さまざまな山積する課題に対し尽力されてきました。

今新会長は、新型コロナ流行は平時ではなく有事であるとし、札幌市と協力のもと、新型コロナに対する医療提供体制、検査体制、そしてワクチン接種体制など迅速かつ的確に判断を下し対応されています。7月には新型コロナワクチン供給不足問題が発生し、札幌市に対し個別接種医療機関への影響を最小限に抑えるために関係機関に働きかけを行うなど最大限の努力をされております。今後も行政へは言うべきことはしっかりと伝え、毅然とした態度で対応していくとともに、医師会として協力できることは何でもするという姿勢で取り組み、最善の協力体制を取っていくと決意表明されています。

今先生の座右の銘は、「求同存異」だそうです。相手との違いをお互い認め合いつつ、一致する大きな目標に向かって進むため話しあうという四字熟語です。札幌市医師会員一人一人の立場の違い、行政と医師会の立場の違いなどはありますが、魅力的で誇りをもって参加できる医師会を構築すること、また、市民の健康を守るという共通した目的のため、今後も益々活躍されることと思います。

北海道医報通信員
札幌市医師会理事 百石 雅哉

石狩医師会

会長 森川 満 先生



令和3年8月、前会長の立石圭太先生が勇退され、森川満先生が新医師会長として就任しました。

先生は、私の勤務する石狩病院の院長ですが、旭川医科大学の医局時代からの上司にあたります。今から約20年前、先生から熱心に誘っていただいたのがきっかけで、私も石狩病院に籍を置くことに決めました。

先生は、病院では、やわらかい口調で患者さんに優しく接するので、患者さんからは優しい先生と思われるようです。しかし、実は、仕事に厳しい面もあるのです。

それは、今年の新型コロナワクチンの接種の時にもありました。日本で初めてのワクチンであり、しかも住民接種の最初は高齢者とのこと。病院では、不安を持ち慎重に進めていきたい職員も多い中、次順位の基礎疾患を持つ患者さんまで、早く打ってあげないといけないと職員に発破を掛け、土日も休まず、毎日ワクチンを打ち続けました。職員は毎日ヘトヘトです。(外部の人が一見すると、パワハラがあったのではと思うくらいかもしれません。(笑))

でも先生は、陰では職員のことを大変労っておりました。お年寄りや透析患者が早く打って良かったとニコリして帰られるのを見ると、ギリギリのところを病院を動かされていたと思います。事実、先生自身も空き時間のほとんどを接種者の予診にあてて参加されていました。

さて、先生はお酒が好きなので、日本酒が好きな私と話が合います。NBAを見るのが好きなので、高校時代はバスケットをされていたのかと思いましたが、意外にも弓道だったことは驚きでした。でも弓道の基本精神は「礼節」を大切に、「相手を慈しむ」ことと聞いたことがあります。これが先生の原点なのかもしれません。

弓道には正射必中という言葉があり、正しい射法で射られた矢は必ず中するという意味だそうです。新型コロナが長く影を落とす地域の医療ですが、先生の正射必中による新型コロナをはじめとした医療課題の解決を期待させていただきます。

石狩医師会監事 須江 洋一

渡島医師会

会長 光銭 健三 先生



令和3年6月26日に開催された渡島医師会定時総会において、2期4年務められた宮村会長の退任に伴い、後任として光銭健三先生が、会長に選任されましたので、ご紹介いたします。

先生は昭和31年生まれの65歳。函館市のご出身で昭和50年に函館中部高校をご卒業後、昭和大学医学部に進まれました。ご卒業後は昭和大学や昭和大学藤が丘病院などで、消化器内科専門医としての研鑽を積み、内視鏡治療や電子内視鏡の開発に従事されていたとのこと。平成4年に御尊父の継承として木古内町に戻られ光銭医院を開業。以来26年余は木古内町にて外来、訪問診療、グループホームの開設など、地域医療の実践に邁進されておりました。会合の場面でもいつもスタッフから連絡をもらい、その対応されている姿を見させていただいていると、昭和大学の建学の精神である「至誠一貫」（常に相手の立場にたって、まごころを尽くす）を実践されているのではないかと思う次第です。

先生は、地域医療に強い思いをお持ちのようで、一時期は木古内町を離れてより過疎の地域での実地医療をと模索されておりました。その思いは現福島町での「やまゆりクリニック」でさらに開花させていきたいというお気持ちのようです。

渡島医師会での活動としては、平成11年より理事、平成15年より常任理事となられ、平成25年より副会長にご就任され、副会長時代は元医師会長の小笠原先生が進められた、中学生へのピロリ菌健診の普及にご尽力されました。

新医師会会長としての抱負をお聞きしたところ、今まで医師会の活動はもちろんのこと、人事や対応といった困り事などを気軽に相談できるような場を設けたいとのこと。また、インターネット関連事業の普及を進めたいとのことでした。

ご趣味として先生はPC関連にも深い造詣があり、ご自身でメーリングリストを作成され、医師会活動の一助とされています。さらに、車の趣味もプロ並みで、自宅に整備用のリフトを設置して、ロータスやアバルト595などをマニュアルで運転されおり羨ましい限りです。

会長には失礼なことですが、私にとって会長は兄貴のような存在で、この雰囲気は会員皆さんに伝わり、さらなる医師会活動の発展につながっていくものと信じております。

渡島医師会副会長 渋谷 好孝

就任のご挨拶

北部檜山医師会

会長 川岸 直樹



2021年4月から北部檜山医師会会長を拝命いたしました。室蘭で生まれ育ちましたが、高校卒業後仙台に30年ほどいましたので、当地域はもちろんのこと北海道に見知った先生はほとんどおりません。室蘭在住の親のため近隣に戻ったのですが、当医師会及び当地域の「よそ者を快く受け入れる」なのか「もともとよそ者の集まり」からなのか、これまで不自由なく過ごさせていただいております。

昨今、医療の最大関心事は新型コロナウイルスと思います。当医師会は2町（せたな町、今金町）1万2千人の住民に対して、常勤医13名程で診療しています。幸いクラスターの発生はなく、軽症の陽性病床2床と疑い病床1床で対応しています。ワクチン接種は、歯科医の先生たちにもご協力いただき、この投稿が掲載される頃には希望者全員に接種できているはずです。

ただ、「毎年ワクチン接種が必要」「ファイザーは3回目も」などと憶測が飛び交っており、日本のワクチン制度を欧米先進国並みにする検討が必要と思います。私の長女はStockholmで生まれ2年ほど過ごしましたが、ワクチン接種時に医師のインタビューはありませんでした。長男はPittsburghで生まれ3ヵ月ほどで帰国したのですが、勧められた接種場所はK-mart奥の薬局でした。今回も、純国産ワクチンであれば日本式の接種法でもいいのかもしれませんが、アメリカ産のワクチンをアメリカでやっているようにできなかったでしょうか。歯科医、臨床検査技師、救急救命士接種まではいきましたが、自己責任型global standardのインタビューフリーになると、地域医療の負担軽減になるはずです。

2年前厚労省が発表した「再編・統合病院」の中に当医師会の2病院も含まれており、コロナ後議論が再燃するでしょう。医師不足、偏在、働き方改革など、書きたいことはいろいろあるのですが、紙面の都合上、今回はここまでといたします。

小樽市医師会

会長 鈴木 敏夫 先生



令和3年6月4日、小樽市医師会定時総会にて、鈴木敏夫先生が第22代小樽市医師会会長に選出されました。鈴木敏夫会長は昭和58年札幌医科大学卒業、同耳鼻咽喉科入局。昭和59年カナダアルバータ州チャールズキヤムセル病院にて研修。昭和63年から市立室蘭総合病院、平成元年から札幌医大医局に勤務。平成4年11月、ご尊父が急逝され閉院（鈴木耳鼻咽喉科医院）となっていた地元小樽に戻り、おたるイアクリニックを開業され、小樽市医師会入会。平成17年から平成27年まで、城守元会長、津田哲哉元会長の下10年間理事を務められました。平成27年から阿久津光之前会長の執行部として、今年まで理事2年、副会長4年務め、会長・医師会を支えてこられました。私は鈴木会長の札幌医大の同期ですが、学生時代から極めて優秀で多趣味であり真面目な性格でした。音楽の才能に長け、ピアノ演奏を趣味とし、ワインに関してはソムリエを凌ぐ知識と味覚・嗅覚（耳鼻咽喉科医として）を持っています。公私に忙しいなか、後志地域の耳鼻科学校健診も担当しております。往復には、念願叶って手に入れたオープンカーで高速道路、海岸線を走る事は至福の時になっているようです。優秀で面倒見のいい鈴木会長は現在、北海道耳鼻咽喉科医会副会長、札幌医大耳鼻咽喉科同門会会長など多くの役職を兼務されています。今後さらに小樽市医師会会長としての重責を担うにあたり、健康には充分留意していただきたいと思っています。

現在小樽市医師会には、新型コロナウイルス感染症対策、看護学校問題、夜間急病センター運営、少子高齢化、他都市に類を見ないほどの急速に進行する人口減少に対する地域医療構想への取り組みなど、問題が山積しています。開かれた、自由な意見交換による理事会・医師会運営と関係機関への気遣いに長けた鈴木会長の手腕に大いに期待するところです。

北海道医報通信員
小樽市医師会理事 瓜田 雷己

就任のご挨拶

羊蹄医師会

会長 佐藤 忠弘



本年6月前任の皆川先生に代わり医師会長に就任しました。同年代の前会長の退任とともに理事を退任しようと考えていましたが、当医師会には都合25年所属し、会長経験のない同年代の会員は2人しかいなく、はからずも会長になってしまったというところです。コロナ禍の中、医師会活動に積極的ではなかった私で良いのかと思っております。

当地の医師会事情をお話しますと、倶知安厚生病院の会員が半数以上になり、他の町村では町村立であったり、自治体との関係が深い診療所が多いです。コロナ禍の中でそれぞれに重要な役割を果たしています。自治体と関係のない診療所は少なくその中で内科を標榜しているのは3軒のみですが、積極的にコロナ対応をしているところもあります。結局、何もしていないのは私のところだけかもしれません。中央では医師会の先生方が活躍しているようですが、田舎の医師会での対応は限られていると感じています。また自治体からの医師会への期待は感じられません。このような現実の中、医師会としての対応はいかにあるべきか模索中です。

最後に自己紹介ですが、1979年札幌医大を卒業、第一内科に入局、25年前に倶知安厚生病院へ赴任し、その後当地で開業しました。私より羊蹄医師会の会員歴が長い先生は3人しかいません。歳をとってしまいました。

写真はホールインワンを達成したときの物です。人生の中で一番輝いた瞬間でした。



空知南部医師会

会長 牧野 裕樹 先生



令和3年7月16日に開催された役員会にて、牧野裕樹先生が空知南部医師会の新会長に選出されました。

牧野先生は昭和36年のお生まれで、昭和63年に獨協医科大学を卒業後、北海道大学医学部第一内科に入局、北海道大学病院、幌南病院（現KKR札幌医療センター）、国立療養所札幌南病院、岩見沢労災病院（現北海道中央労災病院）、北海道大学医学部登別分院、北海道社会保険中央病院（現JCHO北海道病院）などの勤務を経て平成7年1月にお父様の開設した由仁町の牧野内科医院の院長に就任されました。由仁町は牧野先生にとって幼稚園、小学校と幼少時代を過ごされていた縁のある場所だそうです。

長きに渡り医師会の理事、副会長を務められこの度前会長の梶先生の後を受け全会一致で新会長に就任されました。

大学時代はアメリカンフットボール部主将として関東医科歯科リーグで奮闘されており、スポーツは観ることもすることも好きとお話されるスポーツマンであります。ゴルフがお好きで長年プレーされており、医師会のゴルフコンペの幹事を務められています。ゴルフを通じて医師会の結束を高め、引っ張って行かれております（ちなみに全くゴルフのできない私はいつも恐縮しております）。普段からジム通いをされ体調管理を怠らない牧野先生はコロナ禍となりジム通いが難しくなったため、ご自宅にトレッドミルを購入し苦手なランニングで運動不足を解消しているとのこと。とても同年代とは思えない若々しさを保たれておられます。バイタリティー溢れるお姿は今地域が抱えているさまざまな難題に力強くリーダーシップを発揮していってくださると思います。前会長が築いてくださった連携をさらに高め、会員一丸となってこの難局を乗り越えていくことを期待しております。

北海道医報通信員
空知南部医師会理事 久野 和成

赤平市医師会

会長 渡部 公祥 先生



2021年5月の定期総会で前医師会長の郡正博先生が退任され、後任に第9代赤平市医師会長として渡部公祥先生が選任されました。

先生は釧路市出身で1985年札幌医科大学を卒業後、札幌医科大学第1外科（現在の消化器・総合、乳腺・内分泌外科）に入局、木古内町立国保病院、市立赤平総合病院、道立羽幌病院などで勤務、2019年4月よりあかびら市立病院院長に就任、2019年11月からは札幌医科大学同窓会空知支部会長に選任されています。

あかびら市立病院には1987年～1990年、1991年～1996年、1999年～現在までの30年間以上にわたり勤務されており、その温厚な人柄と、頼まれれば断らないという信念もあり、頼りがいのある医師として、市民・患者さんから、そして職員からも信頼され愛されています。

地方では医師・看護師などの医療職が慢性的に不足しています。病院の歴史も「医師確保の歴史」ともいえるほどで、会長の勤務するあかびら市立病院でも慢性的な医師不足に加え標欠基準が改定されたこともあり2006年には一時的に標欠となり病院存続の危機となりましたが、大学病院医局のご協力や過去に勤務された先生等たくさんの方々のおかげをいただき標欠を脱することができました。また、2007年度末には市立病院不良債務額は約30億円にもなり、「地方公共団体の財政の健全化に関する法律」により、赤平市が夕張市同様財政再生団体となる可能性が高くなりましたが、赤平市・赤平市民とともに病院の再建に取り組み、2012年度には不良債務の全額解消を達成しております。いずれもその先頭に立って医師確保・病院改革に努められたのが渡部会長でした。

地方の人口減少が加速され病院のあり方が今まで以上に問われる時代となっていますが、渡部医師会長のもと赤平市だけではなく空知地域の病院連携・絆が深まり、地域医療が継続・発展できることを願っています。

赤平市医師会副会長 内山 久士

宗谷医師会

会長 伊坂 雅行 先生



本年4月24日に開催されました宗谷医師会総会において、7年間にわたり会長を務められた櫻井晴邦前会長の後任として、伊坂雅行先生が満場一致で新会長に選出されましたのでご紹介申し上げます。

先生は東京にお生まれになり、平成10年に愛知医科大学をご卒業後、小児科医として首都圏の基幹病院で十数年にわたり研鑽を重ね、新生児・周産期医療のスペシャリストとしてご活躍された後、平成24年に奥様の故郷である稚内で“こどもクリニックはぐ”を新規開院され、稚内の小児科医療に尽力される傍ら、医師会活動にも積極的に取り組まれ、現在に至っております。

現在の新型コロナウイルス感染拡大状況においても、率先して行政と折衝を重ね円滑な集団接種を実現され、早速その手腕を発揮してくださっており、大変心強く思っております。

また個人的には、9年前の先生のご開業がまだ全国的に稀であった自治体主導の“稚内市開業医誘致

条例”を利用しての開院第二例目であったため、第一例目だった私は当時大変心強く思い、また稚内出身の奥様にも大変感謝の念を抱いた次第です。私の6人の子供達も全員先生にお世話になっており、このたびの就任を心よりお喜び申し上げる所存です。

宗谷は人口に対する医師割合が全道でも最も少ない地域であり、勤務医数・開業医数ともに充足にはいまだ遠い実情ではありますが、医師ひとりひとりが顔の見える関係であることを活かして、先生を核として皆が連携して今後の地域医療を十分に展開されることを期待しております。なお、稚内市の開業医誘致条例での開業はこの11年間で5例となっていますが、ご高齢などを事情に閉院された先生方もほぼ同数であり、現在においても市内の開業医は不足しているため、ご興味のある先生がいらっしゃいましたらこの場を借りてお誘い申し上げます。

最後に、先生におかれましては、会長に就任され今後ますますご多忙になり大変なことと思われませんが、われわれ宗谷医師会員ひとりひとりが最大限支えていく所存ですので、どうぞご健康に留意され、先生の優しいお人柄と地域に根ざした誠実な医療で、先生ならではの宗谷医師会を展開してくださることを祈念いたしまして、ご紹介とさせていただきます。

北海道医報通信員

宗谷医師会副会長 西岡 健吾